

宋代における「醉僧圖」と醉僧形象

王 歡

はじめに

唐代の畫論著作『貞觀公私畫史』や『歷代名畫記』の記録によると、「醉僧圖」を畫題としたものでは南朝梁の畫家張僧繇の作品が最も早い創作であると見なされる。その後、傳世の繪畫作品及び關連する題跋や詩文を見ると、醉僧を主題とした繪畫は特に宋代に流行していたと考えられる。

現存する「醉僧圖」と見なされる作品は四點ある。そのうち二點は「醉僧圖」と題されており、ほかの二點については題名が異なるが、内容としては「醉僧圖」の主題に屬すると見なされている。これらの繪畫で描かれた醉僧は、酒に酔った勢いで草書を作成する唐代の僧懷素だと考えられている。⁽¹⁾（圖1～4）

「醉僧圖」に關する先行研究では、主に懷素が酔った状態で狂草を書く姿に焦點を當て、「醉僧圖」の意味やその文化背景などについて考察を行っている。⁽²⁾特に鄭文倩氏は、宋代に流行した「醉僧圖」は懷素を主題とするもののみならず、禪定に入った醉僧が表現された作品も存在すると指摘している。⁽³⁾しかし、筆者は、僧懷素を表現する「醉

僧圖」のほかに、張僧繇の「醉僧圖」の系統に属するものも流行していたと考えている。また、鄭氏の論述は「醉僧圖」の圖像分析に重點を置いており、宋代の人々が醉僧及び「醉僧圖」をどのように理解していたのか、なぜ宋代以降に「醉僧圖」への関心が徐々に薄れていったのかの理由については、さらなる検討が必要であろう。

そこで本稿では、「醉僧圖」が現れた背景とその意味を明らかにした上で、宋代の「醉僧圖」に関連する詩文や題跋を通じて、當時の人々の醉僧に對する考えと評價を詳細に考察・分析していきたい。これにより、宋代における醉僧及び「醉僧圖」が持つ意味について、より深い理解が得られると期待する。

一、「醉僧圖」の由來

「醉僧圖」を最初に描いたとされるのは、南朝梁の武帝の時の畫家張僧繇である。張僧繇は道釋畫を得意とし、佛教を深く信仰していた武帝が建立した多くの寺院の裝飾畫を手掛けたと伝えられている。⁽⁴⁾

張僧繇の「醉僧圖」について、唐代の劉餗が『隋唐嘉話』に次のように記録している。

張僧繇始作「醉僧圖」。道士每以此嘲僧。群僧恥之、於是聚錢數十萬、買閻立本作「醉道士圖」。今並傳於代。⁽⁵⁾

張僧繇始めて「醉僧圖」を作る。道士毎に此を以て僧を嘲る。群僧之を恥じ、是に於いて錢數十萬を聚め、閻立本に買えて「醉道士圖」を作らしむ。今並びに代に傳はる。

張僧繇が「醉僧圖」を描いた後、道士たちはこれを見ていつも僧侶を嘲っていたため、群僧はお金を集めて、閻立

本に依頼して「醉道士圖」を作り、彼らに對抗した。これら二圖は當時の世に傳わつていという。

劉餗の『隋唐嘉話』のほかに、唐代の裴孝源の『貞觀公私畫史』⁽⁶⁾及び張彥遠の『歷代名畫記』⁽⁷⁾にも張僧繇の「醉僧圖」が記録されている。しかし、その「醉僧圖」の内容や趣旨、醉僧の姿がどのように表現されたのか、醉僧は一人なのか大勢なのか、それは醜態を演じている姿なのか、或は單なる戲畫的なものなのかといった點については、いずれも言及がなく、多くの疑問が残されている。

醉僧とは、文字通りにとれば、酔った僧侶のことを指す。佛教では不飲酒戒によつて出家者及び在家信者の飲酒を禁じているが、實際にはそう簡單に制御できるものではないようである。

佛教は紀元前後に中國へ傳來し、戒律の展開は三國時代に始まつたとされている。⁽⁸⁾ 佛典では飲酒が厳しく禁じられており、戒律の立場からするなら、出家者は不飲酒戒を守るべきである。⁽⁹⁾ しかし、當時の佛教關連の文獻では僧侶の飲酒事例が時折見られる。例えば、後漢末期の沙門と言われる牟子の「理惑論」には「今沙門耽好酒漿、或畜妻子。取賤賣貴、專行詐給。(今沙門は酒漿を耽好し、或いは妻子を畜ふ。賤を取り貴を賣り、専ら詐給を行ふ)」⁽¹⁰⁾と、僧侶の様々な破戒行爲が述べられている。

張僧繇が「醉僧圖」を描いた時期、すなわち佛教が深く信仰され榮えていた南朝梁にも、僧侶が酒を飲む行爲が記録されている。武帝が僧侶たちに酒肉を控えるようにと命じた「斷酒肉文」には、當時の出家者が酒を飲んで肉を食べる行爲についての記述があり、酒肉を禁斷すべきことを説いている。⁽¹¹⁾ また、『隋唐嘉話』にある「群僧恥之」という張僧繇の「醉僧圖」に對する否定的な評價から、彼が描いたのは僧侶が酔った無様な様子ではないかと思われる。恐らくこの繪は、惡行を戒めるための勸誡畫として描かれたのだろう。僧侶の飲酒行爲は、南朝梁だけではなく、唐

代に至つても批判されていたと考えられる。

北宋に董道が著した『廣川書跋』には、劉餗の『隋唐嘉話』に言及された「醉僧圖」と「醉道士圖」に關する記述がある。この中で、ある人は僧侶が戒律を無視して酒を飲んでいたのかどうかについて疑問を抱いていると記録されている。⁽¹²⁾

醉僧圖、唐說本出張僧繇、以爲戲僧圖。又謂顧長康嘗以所見於寺而寓之圖、以發嗶嘰。今考張舜賓、李嗣眞、朱景眞畫錄、皆無此事。不知其說果何據。劉餗又謂閻立本添冠巾爲道士、此自爲「醉道士圖」矣。非此謂也。

或曰、梵教西來。自魏黃初、始許中國人依律爲僧。其法戒甚嚴、不應至顧長康時已極於此。曰、余觀惠深與經律法師群議立制、便謂不遵禁典。無賴姦人、囊橐其間、本非求淨土泥洹也。當太武西伐蓋吳、長安沙門飲從官酒。⁽¹³⁾

發其窟室、命有司按寺誅之。閱其財產、大得釀具。然考之太武與顧長康、其久近⁽¹⁴⁾可以知也。彼授僧律者沈酣若此、則聚飲而歌舞、亦當時常有也。

醉僧圖、唐說是本より張僧繇に出で、以て戲僧圖と爲す。又た顧長康嘗て寺に見る所を以て之を圖に寓し、以て嗶嘰を發すと謂ふ。今張舜賓・李嗣眞・朱景眞の畫錄を考ふるに、皆な此の事無し。其の説果して何に據るかを知らず。劉餗又た謂ふ、閻立本冠巾を添へて道士を爲り、此れ自ら「醉道士圖」爲り、と。此の謂ひに非ざるなり。

或ひと曰く、梵教西より來たる。魏の黃初自り、始めて中國の人の律に依りて僧と爲るを許す。其の法戒甚だ厳しく、應に顧長康の時に至りて已に此に極むべからず。曰く、余惠深と經律法師と群議して立制するを觀るに、便ち禁典に遵はざるを謂ふ。無賴の姦人、其の間に囊橐し、本より淨土泥洹を求むるに非ざるなり。太武西に蓋

呉を伐つに當り、長安の沙門從官の酒を飲む。其の窟室を發し、有司に命じて寺を按じて之を誅めしむ。其の財産を闚し、大いに釀具を得。然れども之を太武と顧長康とに考ふれば、其の久近以て知るべきなり。彼の僧律を授かる者すら沈酣して此くの若くんば、則ち聚飲して歌舞するも、亦た當時常に有ることなり。

董道はまず、「醉僧圖」に關する議論を紹介している。この繪は、唐代には張僧繇の作品であるとされ、「戲僧圖」と見なされている。一方で、東晉の顧愷之が寺院で見た酔った僧侶の姿を描いたという別の説もあるが、張彦遠や李嗣眞、朱景玄の著録には顧愷之の「醉僧圖」に關する記録はなく、その根據は不明である。⁽¹⁵⁾さらに、董道は、この繪を劉餗が言及した閻立本が醉僧に冠巾を加えて作つた「醉道士圖」ではないことも指摘している。⁽¹⁶⁾

續いて、董道は「醉僧」について、南齊の慧深の時に、すでに多くの僧が戒律を守らず、本來佛教を信じていない人々が寺院を隠れ家としていたこと⁽¹⁷⁾を引用し、また北魏の太武帝が長安の寺院に隠された酒器や財産を大量に見つけた例⁽¹⁸⁾を擧げて、昔から僧侶が酒を飲むことは多かつたと指摘している。

董道は自身が見た「醉僧圖」の作者や内容について明確に述べていないが、その記述及び跋文にある「戲僧圖」や「以發嚙嚙」という評語から、この繪に描かれているのは戒律を守らずに酔いしれた、無様な僧侶の姿であると推測できる。これは張僧繇の「醉僧圖」に近いもの、あるいはその模本である可能性が高いと考えられる。

以上で見てきた「醉僧圖」は、書を揮毫しようとする姿が描かれた傳世の「醉僧圖」とは異なり、その間に何らかの變化があつたと考えられる。それでは次に、張僧繇以降、醉僧のイメージがどのように變化していったのかを検討していく。

二、懷素醉僧圖

傳世の「醉僧圖」と題された繪畫は二點ある。一つは臺北國立故宮博物院に所藏されており、「嘉定庚午劉松年畫」という落款が左下に記されている。もう一つはアメリカのフリーア美術館にあり、「李伯時畫」と落款がある。⁽¹⁹⁾ 雙方の作品には、下記の詩句が添えられており、畫中の情景はこの詩意に沿って描かれていると見なされる。

人人送酒不曾沽、每日松間掛一壺。草聖欲來狂便發、眞堪畫作醉僧圖。

人人酒を送り會て沽はず、毎日松の間に一壺を掛く。草聖來たらんと欲すれば狂便ち發し、眞に畫きて醉僧圖と作るに堪ふ。

多少の文字の異同はあるが、この詩は北宋の郭若虛の『圖畫見聞誌』に記載されており、唐代の懷素の作とされている。⁽²⁰⁾ 郭若虛の記述は劉餗の『隋唐嘉話』の内容を踏まえたものであるが、張僧繇が「醉僧圖」を作ることと、道士がこれで僧を嘲ることの間に懷素の詩を挿入したものである。

又僧繇曾作「醉僧圖」傳於世。長沙僧懷素有詩云、人人送酒不曾沽、終日松間繫一壺。草聖欲成狂便發、眞堪畫入「醉僧圖」。然道士每以此嘲僧。群僧於是聚鏹數十萬、求立本作「醉道圖」。並傳於代。⁽²¹⁾

又た僧繇曾て「醉僧圖」を作り世に傳はる。長沙の僧懷素に詩有りて云く、人人酒を送り會て沽はず、終日松の間に一壺を繫く。草聖成らんと欲すれば狂便ち發し、眞に畫きて「醉僧圖」に入るに堪ふ、と。然れども道士毎に此を以て僧を嘲る。群僧是に於いて鏹數十萬を聚め、立本に求めて「醉道圖」を作らしむ。並びに代に傳はる。

郭若虚による編集を通じて、張僧繇の「醉僧圖」に描かれたものは、懷素の詩にある「草聖欲成狂便發」という酒に酔って狂草を創作しようとする醉僧の姿と結びつけられている。ここで言及される「草聖」とは「狂草」を指していると考えられる。⁽²²⁾

狂草の創作は酒を飲むことや風狂な行動と関連付けられることが多い。懷素も常に酔った状態で草書を書くことで知られている。唐代には王邕、寶翼、任華、戴叔倫など多くの文人たちが「懷素上人草書歌」と題した歌を作り、懷素の狂逸な草書の創作の様子を描寫している。⁽²³⁾ 例えば、任華は、懷素が狂氣じみた状態で大聲を上げながら、腕を振り上げ、一瞬で千萬の文字を書き留める姿を詠んでいる。彼の草書は、巨大な鯨魚が海島に向かって突進するかのようで、また長い蛇が草叢を這い抜けるかのようであり、様々な變化に富むことが表現されている。⁽²⁴⁾

懷素は酒を愛し、草書を好んでおり、酔った状態で狂草を創作する様子は、彼より少し前の時代の張旭に似ているとされる。ただし、懷素とは異なり、張旭は出家者ではない。當時の人々はしばしば彼らを同列に論じ、懷素を「以狂繼顛」と評價し、彼の飲酒行爲を破戒として批判することはなかった。⁽²⁵⁾ このように、懷素は酩酊しながら狂逸な草書を創作する狂僧としてのイメージが定着し、「醉僧」は懷素の別稱ともなった。⁽²⁶⁾ また、懷素が「醉僧圖」に對して「真堪畫入醉僧圖」と嘆じたのは、張僧繇が描いた醉僧の姿から、自分自身が酒に酔って草書を揮毫する様子を連想したためだろう。この酔った状態こそが、草書創作において必要な境地であり、様々な變化や不思議な効果を生み出す源であると考えられる。⁽²⁷⁾

つまり、當時の人々は懷素が出家者でありながら酒を飲むことは特に問題視せず、彼の風狂な創作の状態及び狂草作品の出来栄えにのみ注目していたことがわかる。そのため、懷素の影響のもとで、「醉僧圖」の焦點が、酔った僧

侶への批判から、酔僧の狂草創作への関心に変わっていったと考えられる。そして、懷素が酒に酔いながら草書を書く姿と彼の「人人送酒」という詩の影響を受けて、宋代には「懷素酔僧圖」が生み出された。

北宋の文人畫家李公麟は「酔僧圖」を描いたとされている。『宣和畫譜』には李公麟の「酔僧圖」が記録されており、⁽²⁸⁾同時代の毛滂や慧洪⁽²⁹⁾も彼の「酔僧圖」に對して詩を詠んでいる。ここでは毛滂の「跋李伯時酔僧圖」を見てみよう。

道人三昧一壺中、筆下驚蛇怖小童。日日松間好消息、酒香先過野橋風。

⁽³⁰⁾

道人三昧一壺の中、筆下の驚蛇小童を怖れしむ。日日松間の好消息、酒香先に過ぐる野橋の風。

毛滂は明確に述べていないが、彼の詩は懷素を對象として書かれたと考えられる。一句目「道人三昧一壺中」における「三昧」は、懷素が自ら草書の奥義を極めたと言った（「自言得草聖三昧」⁽³¹⁾）ことを連想させる。この狂草の奥義は、まさにその壺の酒にあると示唆されている。「驚蛇」は、懷素の草書の粗放でありながら自由な筆使いを示している。また、「筆下驚蛇怖小童」という表現から、李公麟の「酔僧圖」に描かれたのは、狂草を書く懷素の姿である可能性が高いと考えられる。これは、彼が酒に酔った状態での創作における誇張された動作や、完成した作品の狂逸な出来栄えが子供を驚かせることを表している。そして「日日松間好消息」は、懷素の詩句「終日松間繫一壺」に基づくものだろう。

懷素が「酔僧」とも呼ばれており、李公麟の繪には彼が酔った状態で草書を書く姿が描かれているため、この作品は「酔僧圖」と題されたのだろう。しかし、前述したように、張僧繇の「酔僧圖」は單に酒に酔い潰れる僧侶を描いており、批判的な意味合いが含まれている。そのため、僧懷素が描かれた「酔僧圖」と張僧繇の「酔僧圖」とは別物

であると考えられる。懷素は「酔い」という状態を藝術創作に不可欠な要素として捉えているため、毛滂もそれを踏まえてこの詩を作ったのだろう。

續いて、董道が『廣川畫跋』で言及した、酒に酔いしれた僧侶を描寫する「醉僧圖」について、宋代の人々がどのような理解を持っていたのかを検討していく。

三、遇賢型の「醉僧圖」

(一) 文人たちの評價

『貞觀公私畫史』と『歷代名畫記』によると、唐代には張僧繇による「醉僧圖」の原本または模本が存在していたが、宋代以降は董道の記述を除き、張僧繇「醉僧圖」に關する記録は見出せない。一方、宋代の詩文や題跋では、道で倒れている醉僧の姿が描かれている「醉僧圖」に關する記述がしばしば見られる。この描かれた醉僧は、禪宗の燈史に記録された五代宋初の僧遇賢と似ているため、ここでは遇賢型の「醉僧圖」と呼ぶことにする。

まず、黃庭堅の「題畫醉僧圖」を見てみよう。

醉李有狂僧、無日不飲酒。或戲與酒、令自作祭文。即應聲曰、惟靈生在閻浮提中、不貪不妬、愛喫酒子。倒街臥路。想汝直待生兜率陀天、爾時方斷得故。何以故。淨土之中、無酒得酤。⁽³²⁾

醉李に狂僧有り、日として酒を飲まざる無し。或ひと戯むれに酒を與へ、自ら祭文を作らしむ。即ち應聲して曰

く、惟れ靈は生まれて閻浮提の中に在り、食らず妬まず、酒子を喫むを愛す。街に倒れ路に臥す。想ふに汝直だ兜率陀天に生るるを待ち、爾の時方に斷つを得る故なり。何を以て故か。淨土の中、酒の酤るを得る無し。

ここでは、日々酒を嗜む狂僧の姿が描かれている。彼が他人に應じて自ら作った祭文の中で、自分が酒を愛し、酔っ拂うと道端に倒れること、そして淨土には酒を賣る場所がないため、兜率陀天に往生するまで斷酒することはできないと述べている。

黃庭堅の跋文に言及されている祭文は、趙令時の『侯鯖錄』では蘇軾の發言として記録されており、これは狂僧が酒に酔って死にかけた時に作られたものとされる。⁽³³⁾

同様の記述は慧洪の『林間錄』にも見られるが、祭文のほかに、慧洪はこの狂僧を「吐詞怪奇、世莫能凡聖之。」⁽³⁴⁾を吐くこと怪奇にして、世能く之を凡聖とすること莫し」と評價し、彼が普通の僧ではないことを指摘している。慧洪自身は禪僧であり、謝逸が書いた『林間錄』の序文から、この書は高僧や賢者の言動を記録し、慧洪が彼らに對して抱く敬意を表すものであることがわかる。⁽³⁵⁾ここから見ると、内容に若干の違いはあるものの、この酒を飲む狂僧は、當時の蘇軾や黃庭堅、慧洪などの文人たちの間でよく知られた存在であり、彼らはこの醉僧に對して批判的ではなかったと考えられる。

醉僧の名前については三人とも言及していない。しかし、醉僧が作った祭文の一部は、南宋の正受が編纂した『嘉泰普燈錄』に収録されており、これは五代宋初の酒仙として知られる僧遇賢の偈であるとされている。⁽³⁶⁾また、同書に収録された遇賢の傳記によると、彼は三十歳で具足戒を受けたが、普段から酒を好んでおり、酔った際に詩文を作り、人々を戒めたと伝えられている。⁽³⁷⁾

遇賢に關する早期の記録は、北宋の朱長文が編纂した『吳郡圖經續記』に見られる。彼は長洲東禪寺に住む僧で、林氏の姓を持ち、酒をよく飲んでおり、人の禍福を預知する能力があり、符を用いて病氣を治すことができる⁽³⁸⁾とされている。また、北宋の龔明之が編纂した『中吳紀聞』にも遇賢に關する記述があり、彼の飲酒の量は計り知れず、身の回りには常に奇妙な出來事が起こり、詩を作ることも好むという⁽³⁹⁾。

これらの記述から、遇賢は不思議な力を持ち、酒を好み、酔った状態で詩を詠むことができる。その詩は人々を戒め、善なる道へと導くものであることがわかる。

遇賢は『嘉泰普燈錄』において「應化聖賢」として分類されている。「應化聖賢」とは、佛や菩薩が世の人々を救うために、相手の性質や根機に應じて姿を変えて現れることである。これらの佛や菩薩がこの世に現れる際、必ずしも聖なる姿で現れるとは限らない。一般の人々と區別がつかない時もあるれば、反逆者の姿をとることもある⁽⁴⁰⁾。『吳郡圖經續記』にも、當時の人々が遇賢は靈巖寺の智積菩薩に似ていると考え、彼を智積菩薩の再來であると見なしていた、という記述がある⁽⁴¹⁾。つまり、遇賢は菩薩の化身とされており、すでに悟りを開いた状態にあるため、彼が酒を飲むことは破戒行爲とは見なされていない。人々のそれぞれの性質に應じた教化を行う方便として、彼は意圖的に酒を飲む狂僧の姿をしていると考えられる。

それでは、當時の文人がこの醉僧をどのように捉えていたのかについて、蘇軾の「醉僧圖頌」を手がかりとして見てみよう。

人生得坐且穩坐、劫劫地走覓什麼。今年且厠東禪屎、明年去拽西林磨。⁽⁴²⁾

人生坐するを得て且らく穩坐し、劫劫地として走りて什麼を覓めん。今年且らく東禪に屎を厠し、^あ 明年去りて西

林に磨を拽く。

人はゆつたりと座れる時は、落ち着いて座るべきであり、何かを求めて焦って彷徨う必要はないという。三句目で言及される「東禪」は、恐らく遇賢がいた東禪寺を指しているだろう。また、「西林」と言えば、有名な廬山の西林寺が連想される。

これは「醉僧圖」への頌であるが、醉僧の姿は見えない。ここで蘇軾が表現したいのは、臨濟宗の「平常無事」という理念と考えられる。⁽⁴³⁾『臨濟錄』には次のような言及がある。

道流、佛法無用功處、祇是平常無事。屙屎送尿、著衣喫飯、困來即臥。愚人笑我、智乃知焉。古人云、向外作工夫、總是癡頑漢。爾且隨處作主、立處皆眞。⁽⁴⁴⁾

道流、佛法は用功の處無し、祇だ是れ平常無事。屙屎あしちうによう送尿、著衣じやくえきちゆうばん喫飯、困つか來たらば即ち臥す。愚人は我れを笑ふも、智は乃ち焉を知る。古人云く、外に向かつて工夫を作すは、總べて是れ癡頑の漢なり、と。爾且らく隨處に主と作れば、立處皆な眞なり。⁽⁴⁵⁾

佛法は努力して修めるものではなく、日常のあらゆる行爲こそが禪の修行であり、悟りへの道である。どこにいても修行することができるという。「屙屎送尿、著衣喫飯、困來即臥」とは、日常生活の中で最も平凡な行いの代表例を表している。また、「平常無事」は、自分の外に佛を探求するような人爲的な努力をせず、自分の心が本來佛であるため、ただ日常生活の中でありのままの自分の心に向き合い、内面を探求すべきだという意味であると考えられる。醉僧は酒を飲んで、時には異常な行動をすることもあるが、それはすべて彼自身の心に従って、あるがままに行動しているのである。今年は東禪寺でこのような日常生活を送り、來年は西林寺に移るかもしれない。彼は現在の自分

に安住しており、未來のことは自然の流れに任せ、不安や焦りを感じることなく、安定した心境で生活している様子が想像できる。蘇軾は、恐らく畫中の倒れている醉僧の姿から「平常無事」の理念を連想し、この詩を詠んだのだろう。

また、慧洪は李公麟の「醉僧圖」に對して「醉僧贊」を寄せている。前節で述べたように、毛滂の詩によれば、李公麟の「醉僧圖」に描かれているのは懷素の姿である可能性が高いが、慧洪の詩ではこの點についての言及がない。

我愛龍眠老居士、筆端談笑了萬事。君看一時拈破筆、畫作醉僧醒時意。此是沙門絕妙門、不妨隨處有乾坤。朦朧流涎枕臂臥、破柱疾雷殊不聞。⁽⁴⁶⁾

我れ龍眠老居士を愛し、筆端に談笑して萬事を了ふ。君看よ一時に破筆を拈み、畫きて醉僧の醒むる時の意を作すを。此れ是れ沙門の絶妙門、隨處に乾坤有るを妨げず。朦朧にして涎を流し臂を枕とし臥し、柱を破る疾雷殊さらに聞かず。

ここで描かれている醉僧は、泥酔して無様な姿ではなく、酔いながらも完全には酔い切っていない状態にあるという。慧洪はこの状態を僧侶の修行における絶妙な秘訣とし、どこにいても自分の世界を持ち、自由自在でいられると稱賛している。

最後の「破柱疾雷殊不聞」で、慧洪は夏侯玄が柱にもたれて手紙を書く逸話⁽⁴⁷⁾、つまり大雨の中で雷が柱を破壊しても、夏侯玄は手紙に集中し続け、周囲の出来事に気づかないかのような状態であったという典故を引用し、彼の外界の混乱に動じない心の平靜さと集中力を表している。そして、「朦朧流涎枕臂臥」という表現は、酔い潰れて涎を垂らしながら腕を枕にして横たわる醉僧が、夏侯玄と同様に、周りの状況から影響を受けずにいる状態を意味してい

る。ここから慧洪は「酔い」という状態を、心の平靜さの表現として捉えていると考えられる。

また、同様の趣旨が表現されているものとして、北宋の呉則禮による「石恪畫醉僧」という詩がある。

倒街臥路誰復嘖、粥魚齋鼓強喚人。莫疑只今五斗醉、要會從來三昧身。

(48)

街に倒れ路に臥すも誰か復た嘖めん、粥魚齋鼓強ひて人を喚ばん。只だ今五斗醉を疑ふ莫れ、從來の三昧身に會するを要む。

石恪は五代後蜀の畫家で、後蜀滅亡後に宋に入った。この詩では、街に横たわる僧侶の姿が描かれており、木魚を打つ音や報齋の鼓の音さえも彼を起こすことができない様子が示されている。この僧は五斗の酒を飲んで酔いしれているように見えるが、実際にはこれは彼が本來追求する三昧の境地であるとされる。つまり、酔僧は酒を飲むことを、自己の心を制御し、周囲の状況に左右されず、三昧の境界に達する方法としてしていると解釋できる。

以上のように、北宋の「酔僧圖」に關する題跋と詩文は、主に酔い倒れている僧侶の姿と、彼らが示す穩やかな状態や精神的な安定に焦點を當てて書かれている。一方、南宋になると、「酔僧圖」に關する言説は減少し、その内容も概ね北宋のものを踏襲している。陸游の「酔僧」⁽⁴⁹⁾という詩や黃文雷の「題酔僧圖」⁽⁵⁰⁾には、酔僧懷素と道端に倒れている酔僧の兩方のイメージが含まれている。しかし、北宋の人々は酔僧の酒を飲むことによって得られる内面の平靜さや心の自在さに關心を示していたのに對し、南宋における酔僧に關する詩文では、酔僧の「應化聖賢」や散聖としてのありようにも注目している。

例えば、黃文雷は「題酔僧圖」の最後に次のように述べている。

紛紛散聖今何爲、頼有一醉留其奇。君不見夜雨閉門難學柳下惠、又不見背水置陣古來惟有韓將軍。

紛紛たる散聖今何をか爲さん、一醉有るに頼りて其の奇を留む。君見ずや夜雨に門を閉じて柳下恵に學び難きを、
又た見ずや水を背にし陣を置くこと古來惟だ韓將軍有るのみなるを。

數多くの散聖たちは今何をしているのだろうか。ただ酔いということだけが、彼らの特異な面を留めるのであるという。散聖とは、佛法の傳授系譜が明確ではなく、狂氣に振る舞う者と見なされ、「應化聖賢」とされることが多い。ここで遇賢が想起されるだろう。この酔っている状態は、彼らの狂氣に満ちた行爲の一因であると同時に、彼らが持つ「奇」とされる獨特性質を示している。また、柳下恵や韓信といった非凡な人物と同様に、懷素や遇賢のような酔僧も單なる酔つ拂いの僧に留まらず、その一見異常に見える行動の背後には、實は高い精神性や深い悟りがあると考えられる。

以上、僧侶が酒に酔う様子を表現している點から見れば、遇賢をイメージした「酔僧圖」と張僧繚の「醉僧圖」は似ていると思われる。しかし、唐代に見られる「群僧恥之」の反應とは異なり、宋代の人々は、遇賢のような酔僧に對して否定的な評價を下しておらず、彼らが酒を飲むことを破戒行爲とも見なしていない。この酔った状態は、心を亂すことなく精神状態を維持するものとされ、ありのままの自己の心へと回歸する方法として捉えられている。また、このような酔僧は、「應化聖賢」や散聖と見なされることもしばしばある。

(二) 遇賢物語の變容

宋代以降、文人たちの「酔僧」への關心は次第に弱まっていった。その理由については、遇賢の物語の變容が手掛かりになると考えられる。

『吳郡圖經續記』と『中吳紀聞』にある遇賢に關する早期の話には、いくつかの不思議な出來事が記載されているが、その内容は簡潔で、特に注目されることはなかった。また、蘇軾、黃庭堅、慧洪などの文人たちは、遇賢の特異な能力の側面には全く觸れていない。

遇賢は「林酒仙」とも稱され、前節で見てきた通り、『中吳紀聞』卷二に彼の話が載せられている。また、同書卷五の「郭家朱砂圓」にも「林酒仙」の名が見られる。そこには、「林酒仙」と呼ばれる人物が地元の郭氏の家をよく訪れ、彼が亡くなる數日前、郭氏の親切に感謝するために藥一杯を與えたが、郭氏はそれをわずか三口しか飲まなかつた。林酒仙はその後、郭氏に朱砂圓という處方箋を授けた。郭氏は藥を三口でやめたため、朱砂圓によつて郭氏は三世代に限つて富豪となつた、という話が記されている。⁽⁵¹⁾ただし、この「林酒仙」が道士か僧侶かは明記されておらず、彼が遇賢と同一人物であるかどうか不明である。しかしながら、南宋の洪邁が編纂した『夷堅乙志』に收録されている「林酒仙」の記述は、『中吳紀聞』卷二と卷五の關連する内容が統合されており、それらはすべて遇賢和尚の物語に取り入れられている。⁽⁵²⁾

また、『夷堅志』とほぼ同時期に成立した『嘉泰普燈錄』にある遇賢の傳記は、『吳郡圖經續記』と『中吳紀聞』の内容が統合された上、さらなる不思議な話が追加されている。例えば、風のため舟が轉覆しかけた際、遇賢が袈裟を帆として用いたところ、風向きがすぐに變つたという話や、街に現れた虎が遇賢に遭遇したら、彼の前で跪いて撫でられた後に去つていったという話などがある。⁽⁵³⁾これらの逸話から、遇賢が天候を左右し、猛虎を制御できるといった特異な能力があることを示している。また、傳記の最後に收録された話は、遇賢が酒屋への感謝を示すために、三世代にわたる富を約束した内容である。しかし、『中吳紀聞』の「郭家朱砂圓」とは異なり、遇賢は酒屋に處方箋

を授けたのではなく、石臼に吐き入れ、それを封じて三日後に開けると、吐いたものが「酒黄」に変わっていた。これは疫病が流行した際の薬となり、酒屋はそれによつて大儲けしたとされている。⁽⁵⁴⁾

このように、北宋から南宋にかけて、酒を好む遇賢の物語が傳播する過程で詳細が變化しつつも、彼の神異的な側面がより強調されるようになったことがわかる。では、遇賢にまつわる神祕な出来事や彼の超能力をどのように理解するのかについて、次に考えていく。

(三) 酔僧と神通

遇賢が示した不思議な力は、佛典では神通力と呼ばれる。それは初期佛教の時代から佛陀や佛弟子が持戒や禪定の修行により一定の段階に達した際に得られるものとされ、衆生を教化するための方便として重視されている。⁽⁵⁵⁾

佛教が中國に傳來した後も、神通力は重要な役割を果たし續けた。南朝梁の慧皎による『高僧傳』の神異篇、唐の道宣による『續高僧傳』の感通篇、北宋の贊寧による『宋高僧傳』の感通篇には、多くの奇跡を引き起こし、不思議な力を持つ僧侶が記録されている。これらの中には、飲酒食肉などの破戒行爲を行う僧侶も含まれている。⁽⁵⁷⁾ このような神異僧は、一般の高僧とは異なり、修行や經典の研究に専念することなく、定住せずにあちこちを廻り、特定の寺院や團體に所屬することは少ない。彼らはしばしば俗世間に混じつて生活し、戒律を守らず、超自然的な能力を持っているとされている。また狂僧とも見なされる。僧傳では高僧として数えられているものの、酒を飲むなど風變わりな行動で、ほかの僧侶から批判や非難を浴びることも少なくなかった。

例えば、『宋高僧傳』感通篇には唐代の廣陵大師についての記述がある。廣陵大師は酒を飲んで肉を食べて、しば

しば道端で酔い潰れていた。また、狂氣が發作すると、大や豚を殺したり、品行の悪い男性たちと殴り合いをするともあった。⁽⁵⁸⁾そして、彼を戒めようとするある老僧との間で次のような會話が記されている。

後有一耆年僧、召大師誡勅之曰、汝胡不謹守戒法。奈何食酒肉、屠犬豕、彊抄市人錢物、又與無賴子弟鬪競。不律儀甚。豈是僧人本事耶。一旦衆所不容、執見官吏、按法治之、何處逃隱。且深累佛法。大師怒色對之曰、蠅蚋徒喋羶腥、爾安知鴻鵠之志乎。然則我道非爾所知也。且我清中混外者、豈同爾齷齪無大度乎。耆年且不能屈。⁽⁵⁹⁾後に一耆年の僧有り、大師を召して之を誡勅して曰く、汝胡ぞ謹んで戒法を守らざる。奈何ぞ酒肉を食ひ、犬豕を屠り、彊いて市人の錢物を抄め、又た無賴の子弟と鬪競す。律儀ならざること甚だし。豈に是れ僧人の本事ならんや。一旦衆の容れざる所、官吏に執見せられて、法を按じて之を治むれば、何處くにか逃隱せんや。且つ深く佛法を累はす、と。大師怒色して之に對へて曰く、蠅蚋徒だ羶腥を喋むのみ、爾安んぞ鴻鵠の志を知らんや。然らば則ち我が道爾の知る所に非ざるなり。且つ我れ清中混外なる者、豈に爾の齷齪にして大度無きに同じからんや、と。耆年且らく屈する能はず。

老僧が廣陵大師の行動を佛法に損なうものとして批判したが、廣陵大師はその勧めを聞き入れず、老僧に對して怒りを見せ、自分の行動は凡僧には理解できないものであると主張した。このような型破りな行動や酒を飲むなどの破戒行爲は、當時の僧侶たちに必ずしも理解されたり受け入れられたりするものではなかったことがわかる。ただし、廣陵大師の傳記の續きによれば、その老僧は廣陵大師が神光を發するのを目撃した後、ほかの僧侶たちと共に彼を超越的な存在であると信じるようになったと記されている。⁽⁶⁰⁾

ここから廣陵大師はもともと悟りを開いた人物であると考えられる。彼が意圖的に惡行を行う理由については、同

書に記録された亡名僧の傳記を参照したい。

亡名僧という人物も酒を飲み肉を食べ、異常な行動で知られている。彼は學人たちが自分の悪い行動を眞似しているのを見て、「未住淨心地、何敢逆行。逆行非諸人境界。（未だ淨心地に住せず、何ぞ敢へて逆行せんか。逆行は諸人の境界に非ず）」と、まだ悟りを開いていない者が違逆の行爲をしてはいけないと嘆じた。その後、彼は學人たちを墓地に連れて、自分が腐った死體の肉を食べる様子を見せたら、彼を眞似する人々が恐怖して逃げ出した。後に學人たちは彼の眞意を理解し、惡行をやめて精進するようになったという。⁽⁶¹⁾ 贊寧はこれに對して、「果證之人、逆化於物、終作佛事、用警未萌。（果證の人、物に逆化するも、終に佛事を作し、用つて未だ萌さざるを警む）」⁽⁶²⁾と評している。

つまり、廣陵大師や亡名僧はすでに悟りを開いているため、戒律や道德に反する行爲を行っても問題ではないとされる。これらの行爲は表面上には破戒に見えるが、實際には教化のための極端な手段と見なされる。彼らは敢えて破戒や狂氣じみた行爲を行い、例えば飲酒などを通じて、自らの聖なる姿を隠しているのである。これは、衆生それぞれの根機に應じた教化や警醒を促す方便であり、一般の凡僧の破戒行爲とは異なる性質を持つていると理解できる。

しかし、このような狂僧の行動は一般には理解しにくいものである。そのため、彼らは神通力行使し、奇異な出來事を起こして、自らがほかとは異なる存在であることを示し、人々に自分を信じさせようとした。これにより、彼らが破戒僧ではなく、超越的な存在であることが示されている。

にもかかわらず、このような神異僧が示した不思議な力は、實際には廣く受容されたわけではないと考えられる。多くの僧侶は譯經や教義の研究などに重點を置いており、文人たちも、超能力より佛教の教理に關心を持つ傾向があ

る。特に宋代以降、禪宗が發展し、士大夫階級の人々の間で廣く受け入れられ、參禪が流行していった。また、文學的な修養を持つ禪僧も増え、文字禪や公案禪の發展が詩と禪との融合を推し進めた。⁽⁶³⁾

神通力は特定の對象が存在することで意味を持つものであるが、多くの文人や僧侶はその對象ではないため、それほど注目されなかったのだろう。そのため、蘇軾や黃庭堅、慧洪の遇賢についての記述では、彼が起こした不思議な出來事への言及がなかったと考えられる。

四、「醉僧圖」以外の醉僧

宋代には、佛教は國家によって統一管理されていたが、財政難のために度牒や紫衣、師號などが販賣されるようになり、僧侶の數が増加したのに對して、その質はいよいよ低下していき、戒律を守らない僧侶も多くなっていた。⁽⁶⁴⁾ また、禪宗では酒に對する容認の姿勢が強まり、禪宗文獻では酒に關する言葉を使用する例もしばしば見られるようになった。⁽⁶⁵⁾

「醉僧圖」に描かれた酒仙遇賢のような醉僧のほかに、宋代の詩文にも酒を飲む僧侶のことがよく表現されている。

北宋には、釋居寧が有名な畫家であり、彼はしばしば酔った後に墨戲を作り、草蟲などを描いた。⁽⁶⁶⁾ 梅堯臣は彼のために詩を寄せて、「寧公實神授、坐使群輩伏。草根有纖意、醉墨得已熟。(寧公實に神授し、坐して群輩をして伏せしむ。草根に纖意有り、醉墨已に熟すを得)」と、彼の「醉墨」に對して高い評價を示している。また、南宋には、

王十朋が他界した老僧を追悼する際に、「疊石峰前二老僧、相逢一笑見真情。社中對酒日初永、林下圍棋秋始清。(疊石峰の前の二老僧、相い逢ふに一笑して真情を見す。社中酒に對して日初めて永く、林下圍棋秋始めて清し)」と詠じ、二人の老僧が酒を飲み、圍碁を打つという日常の風景が描かれている。さらに、吳惟信の「次僧兄山居韻」(其二)では、「詩興常便酒、蔬腸漸畏茶。清閑兄自樂、世事絕無些。(詩興常に酒に便し、蔬腸漸く茶を畏る。清閑にして兄自ら樂しみ、世事絶えて些かも無し)」と、山に隠れ住む僧が俗世を離れ、詩を詠みながら酒を樂しむ悠々自適な生活が描かれている。

ここから、宋代には僧侶たちが酒を飲んで詩を作り、藝術に親しむ様子がうかがえる。⁽⁷⁰⁾ このように酒を飲む僧侶が多くなったことで、單に酒を飲むだけでは、僧侶が批判されたり注目されたりする對象とはなくなり、酒に酔っている僧侶を描いた「醉僧圖」への關心も次第に薄れていったと考えられる。また、宋代の文人たちは酒を僧侶との交流手段や書畫創作の觸媒として重視したため、酒に酔いながら狂草を書く姿を描寫する「懷素醉僧圖」が傳え残されてきたのだろう。

終わりに

本稿では、宋代における「醉僧圖」及び醉僧のイメージについて考察と分析を行った。特に、酒仙遇賢和尚に関する記述と評價は、宋代の人々が「醉僧圖」及び醉僧をどのように捉えていたかを理解する上で重要な手がりとなる。

「醉僧圖」を最初に描いたのは南朝梁の張僧繇とされており、その作品は戒律を破り酒を飲む僧侶を描いたものと考えられる。傳世の「醉僧圖」及び宋代における「醉僧圖」に關連する題跋や詩文の分析から見ると、宋代には、草聖懷素を表現する「醉僧圖」と、酔い潰れて道に倒れている遇賢型の「醉僧圖」の二種類が存在していた。そして後者は張僧繇の「醉僧圖」に近いものであると考えられる。

唐代の文人たちは懷素が酔った状態で行う草書の創作に焦點を當て、酒を彼の狂氣じみた行動や即興的な創作パフォーマンスを促す重要な要素と見なし、彼を「醉僧」とも稱している。懷素の酔いながら草書を書く姿と、彼が張僧繇の「醉僧圖」に對して詠じた「人人送酒」という詩の影響を受け、宋代には「懷素醉僧圖」が創作された。また、宋代の人々が注目するのは懷素の出家者としての立場ではなく、酒が藝術創作に及ぼす影響であると考えられる。

一方、遇賢型の「醉僧圖」は張僧繇の「醉僧圖」の内容と類似するものである。しかし、唐代での「群僧恥之」という反應とは異なり、宋代ではこのような「醉僧圖」に對する否定的な評價は見られない。宋代の文人たちは、描かれた僧侶の酔っている姿を、集中して心の靜けさを維持する狀態の象徴と理解し、酒を飲むことをありのままの自己を保つ手段として捉えている。

また、遇賢のような醉僧は「應化聖賢」や散聖と見なされることもある。彼は酒を飲むなどの破戒行爲や風狂な行動をとるが、これが衆生を導き教化する方便となつている。彼は悟りを開いた人物であり、神通力を持っているため、彼に關わる事跡には神祕的な要素が多く含まれている。神通力は佛教を弘める上で重要な役割を果たしていたのだが、文人たちの間ではあまり受け入れられなかった。蘇軾や黃庭堅などが遇賢型の「醉僧圖」に對して作つた詩文では、その不思議な力や奇妙な出來事に特に言及されていない。加えて、宋代以降、酒を飲む僧侶が増え、酒は彼らの生活

や社交文化の一部となるとともに、文人たちは張僧繇の「醉僧圖」や遇賢型の「醉僧圖」のように、ただ酒に酔っている僧侶の姿を描寫する繪畫への關心が徐々に弱まり、草書が得意である懷素を主題とする「醉僧圖」が引き續き評價されていったと考えられる。

注

- (1) 傳世の「醉僧圖」と題された繪畫は二點ある。一つは北宋末の文人李公麟の傳稱作品、現在はアメリカのフリアー美術館に收藏されている(圖1)。もう一つは南宋の宮廷畫家である劉松年の傳稱作品で、現在は臺北國立故宮博物院に收藏されている(圖2)。兩圖とも、松樹下に座する一人の僧と、その傍で仕える侍童が描かれている。松には酒瓢箪が掛けられ、僧は筆を手にして書を揮毫しようとする姿が表現されている。傳李公麟の作品にはさらに酒を運んでくる二人の人物が描かれている。劉松年の「醉僧圖」について、李霖燦氏はそれが眞跡であるとしている(『劉松年の醉僧圖』、『故宮季刊』第四卷第一號、一九六九年)。その一方、戶田禎佑氏はそれが模本であると指摘している(『劉松年の周邊』、『東洋文化研究所紀要』第八十六號、一九八一年)。また、傳李公麟の「醉僧圖」の時代については、諸説あるが、鄭文倩氏はそれが明代以降の模本ではないかと指摘している(「醉僧之意不在酒——宋代醉僧圖的意涵」、『故宮學術季刊』第三十三卷第四期、二〇一六年)。同じく「醉僧圖」と見なされるのは、京都の個人藏の傳南宋蘇漢臣の「羅漢圖」(圖3)及び上海博物館が所藏する宋代無款の「松下憩寂圖」(圖4)である。「羅漢圖」について、板倉聖哲氏は、その主題は醉僧圖と見

なすことができる」と指摘している『南宋繪畫——才情雅致の世界』（根津美術館、二〇〇四年）作品解説十六）。一方、李玉珉氏はこの「羅漢圖」を南宋の禪僧の日常生活と見なし、僧侶が松の下で筆を持ち巻物を広げる姿は禪偈を書こうとする様子を表していると述べている（『文藝紹興——南宋藝術與文化（書畫卷）』（臺北國立故宮博物院、二〇一一年）作品解説IV六、七）。また、「松下憩寂圖」について、薄松年氏は、それが「醉僧圖」であると提唱し（宋人『醉僧圖』考）、『美術觀察』、一九九七年第五期）、以降の學者もこの見解を取り入れている。

- (2) 注(1)の論文のほかに、「醉僧圖」に關する先行研究としては、紀雪娟「宋代醉僧圖研究」（『社會科學戰線』、二〇一六年第九期）、李小榮「醉僧何不成問題——宋詩醉僧形象略論」（『福建師範大學學報（哲學社會科學版）』、二〇二〇年第一期）が挙げられる。紀氏は、張僧繇の「醉僧圖」と懷素を表現した「醉僧圖」について分析を行ったが、宋代の醉僧を理解する上で重要な人物である僧遇賢に關連する内容には觸れていない。また、宋代に「醉僧圖」が多く現れた理由として、佛教の世俗化や民衆化、そして僧制改革により僧團が混沌としていたことを指摘している。一方、李氏の論文では、宋代の詩歌における「醉僧」について整理し検討している。懷素は唐代における醉僧の典型であるのに對して、宋代の醉僧には多様なタイプが存在すると指摘している。しかし、李氏の論文では詩文に現れる醉僧が多く列擧されているのみで、それらについての分析や議論は不足している。

- (3) 注(1) 鄭氏論文參照。

- (4) 『歷代名畫記』卷七・梁張僧繇「武帝崇飾佛寺、多命僧繇畫之。」（津逮祕書本、下同）

- (5) 『隋唐嘉話』卷中（唐宋史料筆記叢刊本、中華書局、一九七九年）。
- (6) 『貞觀公私畫史』（續百川學海本）。
- (7) 『歷代名畫記』卷七・梁張僧繇條。
- (8) 『魏書』釋老志「後有天竺沙門曇柯迦羅入洛、宣譯誠律、中國誠律之始也。」曇柯迦羅が『僧祇戒本』を譯出し、さらにインド僧を招いて受戒の儀式を行ったことが、中國に戒律が傳來した始まりと見なされている（佐藤達玄『中國佛教における戒律の研究』（木耳社、一九八六年）第三章「戒律の浸透とその變容化」參照）。
- (9) 佛教と禁酒について、道端良秀「佛教と酒」（『中國佛教史の研究』（法藏館、一九七〇年）、所收）參照。
- (10) 牟子「理惑論」（『弘明集』卷一所收、大正五二・四上）。
- (11) 例えば、「斷酒肉文」に出家者の飲酒食肉については、「今出家人、或爲師長、或爲寺官、自開酒禁、噉食魚肉、不復能得施其教戒」とあり、また「今出家人云、我能精進、我能苦行、一時覆相、誑諸白衣、出即飲酒、開衆惡門、入即噉肉、集衆苦本。此是九不及外道」とある。（『廣弘明集』卷二十六所收、大正五十二・二九五上）
- (12) 「書醉僧圖」（『廣川畫跋』卷三、適園叢書本）。
- (13) 「飲從官酒」、『魏書』釋老志、王氏畫苑本同。于安瀾『畫品叢書』本作「飲以宮酒」。
- (14) 「久近」、于安瀾『畫品叢書』本作「交近」、王氏畫苑本作「文近」。
- (15) 『廣川畫跋』卷三「書醉道士圖」にも「醉僧圖」と「醉道士圖」についての議論が記録されている。
- (16) 現在の劉餗『隋唐嘉話』には、「閻立本添冠巾爲道士」という文が記載されていない。
- (17) 慧深は『高僧傳』義解篇の釋慧基條に附されている。「永後次沙門慧深、亦基之弟子。深與同學法洪、並以戒

潔見重。深後次沙門曇與、亦沈審有器局。」（大正五十・三七九中）「群議立制」云々について、『魏書』釋老志に、「（永平）二年冬、沙門統惠深上言、僧尼浩曠、清濁混流、不遵禁典、精粗莫別。輒與經律法師群議立制」とある。

- (18) 『魏書』釋老志「會蓋吳反杏城、關中騷動、帝乃西伐、至於長安。先是、長安沙門種麥寺內、御驕牧馬於麥中、帝入觀馬。沙門飲從官酒、從官入其便室、見大有弓矢矛盾、出以奏聞。帝怒曰、此非沙門所用、當與蓋吳通謀、規害人耳。命有司案誅一寺、閱其財產、大得釀酒具及州郡牧守富人所寄藏物、蓋以萬計。」

- (19) 注（1）參照。

- (20) 『宣和書譜』（津逮祕書本）卷十九には、懷素の草書帖「醉僧圖詩」という作品名が記録されているが、その内容についての記述はない。また、この詩は蘇軾の「題懷素草帖」（『東坡續集』、明成化本）とされることもあったが、現在ではこの詩は懷素のもので、誤って蘇軾の文集に混じったと考えられている。清の查慎行が蘇軾の詩に注をつける際に、「慎按、石刻先生自題云、此懷素詩也、僕好臨之、人間當有數百本也。後人不加深考、遂訛以此詩編入集中耳。又按、萬首唐人絕句載此詩、亦以爲懷素作。今據此駁正」（『東坡先生編年詩補注』卷五十）と述べている。さらに、明の汪何玉『汪氏珊瑚網名畫題跋』や清の安岐『墨緣彙觀』に收録された「李龍眠醉僧圖」にも、「人人送酒」詩の後に「老泉書懷素詩并倣其草法」と記されている。巻尾にある「東村閑居方外堂」の題跋では、この繪は蘇軾がまず懷素の「人人送酒」という詩を書いて、その後李公麟が人物を描いたという由來であると述べられている。

- (21) 『圖畫見聞誌』卷五、故事拾遺、閻立本條（四部叢刊續編本）。

(22) 唐代と宋代には草書を草聖と稱することがしばしば見られる。草聖の意味について、黃緯中「盛唐以後『草聖』新義析解」(『唐代書法史研究集』(蕙風堂印行、一九九四年)、所收)、松永恵子「中國藝術における『聖』概念の變容」(『書學書道史研究』第十六號、二〇〇六年)、李永忠「草聖何以成問題?——以懷素『題張僧繇醉僧圖』爲例」(『文史知識』第九期、二〇〇六年) 参照。

(23) 「懷素上人草書歌」については、高木重俊「懷素上人草書歌」をめぐって(『語學文學』第三十期、一九九二年)、『懷素上人草書歌』をめぐって(承前)、「語學文學」第三十二期、一九九四年) 参照。

(24) 任華「懷素上人草書歌」「十杯五杯不解意、百杯已後始顛狂。一顛一狂多意氣、大叫一聲起攘臂。揮毫倏忽千萬字、有時一字兩字長丈二。翕若長鯨潑刺動海島、欸若長蛇戔戔透深草。回環繚繞相拘連、千變萬化在眼前。」

(宋陳思輯『書苑菁華』卷十七、中華再造善本南宋版、下同)

(25) 懷素の「自敘帖」には李舟が「昔張旭之作也、時人謂之張顛。今懷素之爲也、余實謂之狂僧。以狂繼顛、誰曰不可」(『書苑菁華』卷十八)と評している。後に懷素と張旭とともに、「顛張狂素」や「顛張醉素」と呼ばれるようになった。また、出家者である釋貫休は「觀懷素草書歌」で「張顛顛後顛非顛、直至懷素之顛始是顛。師不譚經不說禪、筋力唯於草書朽。顛狂却恐是神仙、有神助兮人莫及」(『禪月集』卷六、四部叢刊本)と詠んでいる。懷素が通常の禪僧と異なり、經典を講じず、禪を説かず、ただ草書を書くことに力を注ぎ、その狂氣じみた様子が神仙のようだととして、彼の創作に對する高い評價が表れている。

(26) 例えば、唐の蘇渙「懷素上人草書歌」には「何似醉僧顛復狂」(『書苑菁華』卷十七)とあり、南宋の陸游「草書歌」には「心空萬象提寸毫、睥睨醉僧窺長史」(『劍南詩稿』卷五十八、汲古閣本)とある。また、北宋の蘇

軾、米芾、慧洪なども懷素を「醉素」と稱することがある。唐宋の人々の懷素の草書に對する評價について、松永恵子「中唐から晩唐・北宋中期の文人の狂草觀」(『比較社會文化研究』第十六號、二〇〇四年) 参照。

- (27) 草書だけではなく、唐代には酒を飲んだ後に繪を描くことも多かった。例えば、朱景玄『唐朝名畫錄』に逸品畫家と評された王墨などが挙げられる。飲酒が藝術創作に與える影響は、宋代にも認められている。飲酒と書畫創作の關係については、島田修二郎「逸品畫風について」(『中國繪畫史研究』(中央公論美術出版社、一九九三年)、所收。初出は『美術研究』一六一、一九五一年)、矢淵孝良「蘇軾の酒と藝術(一)」(『言語文化論叢』七、二〇〇三年)、拙論「北宋繪畫論における『逸品』の變容」(『日本中國學會報』第七十三號、二〇二一年) 参照。

- (28) 『宣和畫譜』卷七、人物三、李公麟條(津逮祕書本、下同)。

- (29) 慧洪「醉僧贊」(『注石門文字禪』卷十九、中華書局、二〇二二年)。

- (30) 『東堂集』卷四(四庫全書珍本)。

- (31) 唐李肇『唐國史補』卷中「長沙僧懷素好草書、自言得草聖三昧。棄筆堆積、埋於山下、號曰筆塚。」(『唐國史補校注』、唐宋史料筆記叢刊本、中華書局、二〇二一年)

- (32) 『豫章黃先生文集』卷二十七(四部叢刊本)。

- (33) 北宋趙令時『侯鯖錄』卷四「蘇州僧自祭文」「東坡云、近在蘇州、有一僧、曠達好飲、以醉死將瞑、自作祭文云、唯靈生在閭浮提、不貪不妬、愛喫酒子、倒街臥路、想汝直待生兜率天、爾時方斷得住。何以故。淨土之中、無酒得沽。」(唐宋史料筆記叢刊本、中華書局、二〇〇二年)

(34) 北宋慧洪『林間錄』卷下「醉里有狂僧、號戒道者。依止聚落、無日不醉。然吐詞怪奇、世莫能凡聖之。有飲以酒者、使自爲祭文、戒應聲曰、惟靈生在閻浮、不嗔不妬、愛喫酒子。倒街臥路。直得生兜率陀天、爾時方不喫酒故。何以故。淨土之中、無酒得沽。」(新纂卍續藏八十七・二七五下)

(35) 北宋謝逸「洪覺範林間錄序」「每與林間勝士抵掌清談、莫非尊宿之高行、叢林之遺訓、諸佛菩薩之微旨、賢士大夫之餘論。每得一事、隨卽錄之。垂十年間、得三百餘事。」(新纂卍續藏八十七・二四五上)

(36) 『嘉泰普燈錄』卷二十九・偈頌「酒仙和尚十首雜詠」其十「生在閻浮世界、人情幾多愛惡。只要喫箇酒子、所以倒街臥路。死後却產娑婆、不願超生淨土。何以故。西方淨土且無酒沽。」(新纂卍續藏七十九・四八一中)

(37) 『嘉泰普燈錄』卷二十四・應化聖賢「酒仙遇賢和尚」「三十剎染圓具。往參錢塘龍冊珠禪師、發明心印、回居明覺院。唯事飲酒、醉則成歌頌、警道俗。因號酒仙。」(新纂卍續藏七十九・四三四下)

(38) 『吳郡圖經續記』卷中「明覺禪院、在長洲東南、俗所謂東禪者。晉開運中、有僧遇賢、姓林氏、常以酒肉自縱、酒家或遇其飲、則售酒數倍於他日、世號爲酒仙。而能告人禍福、必驗。與符治疾者、必痊。建隆二年、來居是院、創佛屋、修路衢、無慮用錢數百萬。雖稱丐於人、而人不知其所從得者。蓋其容似靈巖智積聖者、而每與人符、以陳僧爲識、或謂爲後身、其塑像今存院中。」(密韻樓叢書本)

(39) 『中吳紀聞』卷二「林酒仙」「國初時、長洲縣東禪寺有僧曰遇賢、姓林氏、以其飲酒無算且多靈異、故鄉人謂之林酒仙。口中可容兩拳、嘗醉於酒家。每出、群聚而觀之者不絕。能自圖其形、無毫釐不相似。好賦詩、雖多俗語、中含理致、然亦有清婉者。」(知不足齋叢書本)

(40) 『大智度論』畢定品第八十三之餘「是菩薩於衆生中、或爲父、或爲子、或爲師、或爲弟子、或爲主、或爲奴、

或爲象馬、或爲乘象馬者、或時富貴力勢、或時貧賤。於此諸事、亦不爲染汚。」(大正二五・七一七下)

- (41) 注(38) 参照。また、智積菩薩について、『佛祖統紀』法運通塞志・梁武帝に「十五年、西天沙門自圖其形于吳中靈巖寺、像遇夜起行道、祈禱神應。後有梵僧曰、此智積菩薩也」(大正四九・三四九中)とある。

- (42) 「醉僧圖頌」(『東坡續集』卷十、明成化本)。

- (43) 『蘇軾文集校注』卷二〇「醉僧圖頌」注にも指摘されている。『蘇軾全集校注』(河北人民出版社、二〇一〇年)、第十二冊、文集三、一二三二頁

- (44) 『鎮州臨濟慧照禪師語錄』(大正四七・四九八上)。

- (45) 訓讀は入矢義高譯注『臨濟錄』(岩波文庫、二〇二〇年、第三十八刷)五〇頁参照。

- (46) 注(29) 所掲。

- (47) 『世說新語』雅量「夏侯太初嘗倚柱作書。時大雨、霹靂破所倚柱、衣服焦然、神色無變、書亦如故。賓客左右、皆跌蕩不得住。」(四部叢刊本)

- (48) 「石恪畫醉僧」(『北湖集』卷四、湖北先正遺書本)。

- (49) 陸游「昔人有畫醉僧道士醉學究者、皆見于傳記及歌詩中、予暇日爲各賦一首」、うちの「醉僧」には「青旗獵獵秋風吹、長瓶一吸亦足奇。但辨道傍常醉倒、不須解作藏真州」とある。『劍南詩稿』卷四十、汲古閣本

- (50) 黃文雷「題醉僧圖」「僧之飲酒、地獄咫尺。此僧飲酒、天龍辟易。僧之飲酒、背面抵諱。此僧飲酒、口角齟齬。

披毛帶角卽不理、倒堦臥路而已矣。一生般若幾杯湯、箇是逃禪眞法子。不憂兜率不著渠、只憂兜率無酒酤。臨行自謗不羞恥、至今留與人畫圖。……我觀此僧面孔眞滑稽、醉中定解草聖并賦詩。當其幕天席地時、惜無人以

筆墨隨。」〔看雲小集〕宋陳起輯『南宋六十家集』所收、汲古閣本）

- (51) 『中興紀聞』卷五「郭家朱砂圓」「郭氏本郡中一小民。所謂林酒仙者、每至其家必解衣以醉之。酒仙遷化前數日、語郭氏曰、疇昔荷相接之勤、以藥一杯爲報。郭氏以味惡、頗難之。力強之飲、至三呷而止。酒仙自舉而盡、遂授以朱砂圓方、曰、惜乎、富及三世爾。郭氏竟售此藥、四方爭求買之。自此家大富三世、之後絕無有欲之者。」
(知不足齋叢書本)

- (52) 『夷堅乙志』卷十七「林酒仙」「崇寧間、平江有狂僧。嗜酒亡賴、好作詩偈、衝口卽成。郡人呼爲林酒仙、多易而侮之、唯郭氏一家、敬待之甚厚。郭母病、僧與之藥一盞。曰、飲不盡卽止、勿強進也。已而飲三分之二。僧取其餘棄於地、皆成黃金色。母病卽愈。且留朱砂圓方與其家。郭氏如方貨之、遂致富。」(中華書局、二〇〇六年)

- (53) 『嘉泰普燈錄』卷二十四・應化聖賢「酒仙遇賢和尚」「有頃、石泐後泛江風、將覆舟。篙人大恐、師解袈裟爲帆、風卽轉。有虎入城、見師跪伏、師撫摩、虎遂去。」(新纂卍續藏七十九・四三四下)

- (54) 「凡經酒家、退則座客常滿、以是日常俟至、聽其所需。師將順世。往其家曰、平時飲汝酒、未嘗酬直、今酬之可富三世。因見石臼、遂嘔而暮之曰、閱三日可開。三日啓封、結如雞子、乃酒黃也。是歲疫盛、沃以酒、服者無不愈、其家遂富。」(新纂卍續藏七十九・四三四下、四三五上)

- (55) 神通力は一般に、神足通、天眼通、天耳通、他心通、宿命通及び漏盡通の六種の超能力を指す。それは禪定の修行による必然的な成果とされ、佛教の初期經典にその内容が散見される。例えば、阿含經典には釋尊が第四禪まで入り、三明神通を得たという降魔成道の話がしばしば見られる。神通力について、佐々木閑「神通力の

獲得方法」(『禪學研究』第七十二號、一九九四年)、平井俊榮「神異と習禪」(『駒澤大學佛教學部論集』第三十二號、二〇〇一年) 參照。

(56) 神通の目的について、『大智度論』初品中欲住六神通釋論第四十三「問曰、神通有何次第。答曰、菩薩離五欲、得諸禪、有慈悲故。爲衆生取神通、現諸希有奇特之事、令衆生心清淨。何以故。若無希有事、不能令多衆生得度。」(大正二五・二六四中)

(57) 例えば、『高僧傳』神異篇に、狂氣じみた行動をとり酒を好む邵碩は分身や預言の能力を持っており、同様に酒を飲む釋慧通は復活の術を持っている。また、『續高僧傳』感通篇にある釋慧達、釋童進、襄州禪居寺岑闍梨、『宋高僧傳』感通篇にある釋檀特師、釋法喜、釋難陀などが挙げられる。しかし、神異篇や感通篇に收録された僧侶が全て戒律を守らないわけではない。例えば、神通力で有名な佛圖澄は、持律堅固な生活を送っているとされる。(『高僧傳』神異上「竺佛圖澄」「酒不踰齒、過中不食、非戒不履、無欲無求。」(大正五〇・三八七上)

(58) 『宋高僧傳』卷十九・感通篇第六之二「唐揚州孝感寺廣陵大師傳」「釋廣陵大師者、維揚人也。……形質寢陋、性多桀黠、眞率之狀、與屠沽輩相類、止沙門形異耳。好嗜酒啖肉。……或狂悖性發則屠犬彘、日聚惡少鬪毆、或醉臥道傍、揚民以是惡之。」(大正五〇・八三三下)

(59) 大正五〇・八三三下。

(60) 「後一日自外來歸、入室閉戶、有於門隙覘之、見大師坐席放神光、自眉間晃朗、照物洞然。觀者驚報、少頃寺僧奔至、瞻禮稱歎、或有懺悔曾謗之者、或有彈指讚詠之者。明日群僧伺候大師出、焚香致禮。及開戶、瞑目如

入禪定、已長往矣。自此廣陵人寫貌供養、號之爲大師焉。」(大正五〇・八三四上)

- (61) 『宋高僧傳』卷二十一・感通篇第六之四「唐興元府梁山寺上座亡名傳」「釋亡名者、不知何許人也。行終詭異、言語不常、恆見者弗驚、乍親者可怪。平常酷嗜酒而食肉、僉重公行。……時群緇伍一皆倣習、唯此無懼。上座察知而興歎曰、未住淨心地、何敢逆行。逆行非諸人境界。且世云金以火試、待吾一日一時試過。開成中忽作大餅、招集徒衆曰、與汝曹遊尸陀林去。蓋城外山野多墳塚、人所棄屍於此、故云也。上座踞地舒餅裏腐爛死屍、向口便啖、俊快之狀頗嘉、同遊諸僧皆掩鼻唾地而走。上座大叫曰、汝等能饒此肉、方可饒他肉也已。自此緇徒警悟、化成精苦焉。」(大正五〇・八四七中下)

- (62) 大正五〇・八四七下。

- (63) 伊吹敦『禪の歴史』(法藏館、二〇〇一年)第四章參照。また、宋代の文人と僧侶との交流について、長谷川昌弘「宋代における藝術僧について」(『印度佛敎學研究』第四十七卷第一號、一九九八年)、鈴木哲雄「北宋期の知識人と禪僧との交流」(鈴木哲雄編『宋代禪宗の社會的影響』(山喜房佛書林、二〇〇二年)、所收)參照。

- (64) 『宋會要』には「伏見天下、僧尼比之舊額約增十倍、不啻數十萬人。嘗究其源、乃緣尚書祠部歲出度牒幾三萬道、以其歲給數多、民間止直九十已下緡、遂致游手惰惰之輩、或姦惡不逞之徒、皆得投跡於其間、故冒法以干有司者、曾無虛時」(『宋會要輯稿』職官禮部祠部、徽宗大觀四年)とある。また、宋陶穀『清異錄』卷一には「相國寺星辰院比丘澄暉、以艷倡爲妻、每醉點胸曰、二四阿羅、煙粉釋迦。」(寶顏堂祕笈本)とあり、宋代の僧侶の結婚や飲酒の破戒行爲についての記述がある。また、注(8)佐藤書第十六章第一節「北宋時代における

る佛教界の様相」、注（9）道端氏論文参照。

- (65) 例えば、北宋の眞淨禪師の偈に「事事無礙、如意自在。手把豬頭、口誦淨戒。趂出姪坊、未還酒債。十字街頭、解開布袋」とある（『古尊宿語錄』卷四十五・眞淨禪師偈頌「法界三觀」六頌其四、新纂卍續藏六十八・三〇〇中）。また、南宋の明辯禪師にも「狗子佛性有、毗盧愛飲彌勒酒。狗子佛性無、文殊醉倒普賢扶。扶到家中全酩酊、胡言漢語罵妻孥」という發言がある（『嘉泰普燈錄』卷十六「湖州道場正堂明辯禪師」、新纂卍續藏七十九・三九四上）。

- (66) 『宣和畫譜』卷二十蔬果「僧居寧、毗陵人。喜飲酒、酒酣則好爲戲墨、作草蟲。筆力勁峻、不專于形似。每自題云居寧醉筆。」

- (67) 梅堯臣「觀居寧畫草蟲」（『宛陵先生文集』卷十、四部叢刊續編本）。

- (68) 「悼演述二老僧」（『梅溪集』前集卷六、四部叢刊本）。

- (69) 北京大學古文獻研究所編『全宋詩』（北京大學出版社、一九九八年）第五十九冊、三七〇八六頁。

- (70) 注（2）李氏論文には詩僧や琴僧などの藝術僧が多く挙げられている。



圖 1 (上) アメリカフリーア美術館藏 (Freer Gallery of Art)

傳北宋李公麟「醉僧圖」 The Drunken Monk

圖 2 (下) 臺灣國立故宮博物院藏 南宋劉松年「醉僧圖」



圖3 日本京都私人藏 傳南宋蘇漢臣「羅漢圖」



圖4 中國上海博物館藏 宋代無款「松下憩寂圖」

